2021年（令和３年）
６月７日（月）
第1367号

園芸新聞®

発行所
株式会社園芸新聞社
〒180－0001 武蔵野市
吉祥寺北町４－７－13
電話 0422(51)8953
ＦＡＸ 0422(55)7187
発行人 前田 彰宏
購読料 １ヵ年 5,400円
振替 00130－2－85300

農に生きる輝く女性たち

今月号では農業と農学に携わる2人の女性にスポットを当てて紹介します。栃木県で野菜苗生産の会社を経営しているパナプラス㈱の小竹花絵社長と、もう1人は東京農業大学農学部で植物ウイルスを研究しているキム・オッキョン助教です。2人に共通しているのは都会育ちで学生時代は農業には全く関心が無かったにもかかわらず、いまは本当にこの道に進んでよかったと言っていることです。農を志すに至った経緯や現在の仕事内容などを語ってもらいました。

栃木市大久保町230 パナプラス㈱ 小竹花絵社長

大学実習で農業に目覚める

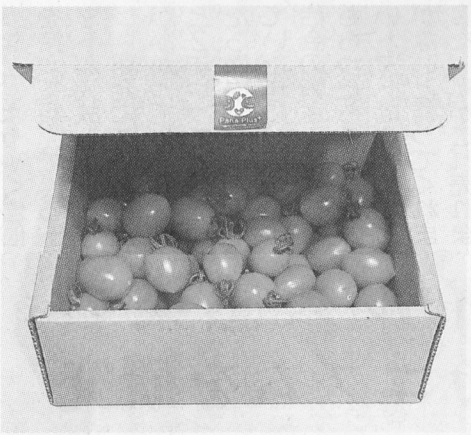
小竹花絵社長は東京都出身で農業に興味はなかったし、野菜はスーパーで見かけるくらいだった。「大学の必修科目で野菜を作る実習があったのですが、暑いのが嫌い、虫が嫌い、汚れるのが嫌いで、本当に嫌々作ったからキュウリが曲がっていたり、トマトが割れていたり、ナスが傷ついていたりで、これは失敗作だから不味いんだろうなと思っていたんです。そのあと収穫して料理をする実習の時、いままで食べていたのは何だったのかというくらい美味しかったし、とにかく甘くて感動しました。そうしたらみんなが笑顔になっていてすごいなと思い、もうその日に農業をやろうと決めたんです。卒業後に専門学校に通って園芸の基礎を学んだあとに栃木県の農業法人で修行しました」

そこがご主人、仲田雅洋さんの実家だった。主に鉢物や植木を扱っていたが、野菜に感動してこの世界に入ったのだから野菜苗を作って販売したいという夢が膨らんだ。ちょうどその頃に雅洋さんの知り合いから敷地面積2、400坪、ハウス約20棟の居抜き物件を教えてもらって借りることになる。「そこを新規就農者に貸してくれたり、銀行の資金援助があったりで本当に運がよかったです」

2010年に創業して2013年にパナプラス株式会社を設立し、いよいよ希望に満ちた苗作りが始まるが当初は4種類だけだった。「すでに成熟した市場に参入するので同じものを作っても負けるから、他ではやっていない珍しい野菜のキワーノ、アピオス、ジャンボ落花生&黒落花生、そしてジャンボオクラを作っていました。いま考えると恐ろしい品揃えですね」

（2面につづく）

起業してホームセンター向けの苗を年間100万本生産するパナプラスの小竹花絵社長



オリジナルのミニトマト「こくパリッ」を２年前から販売

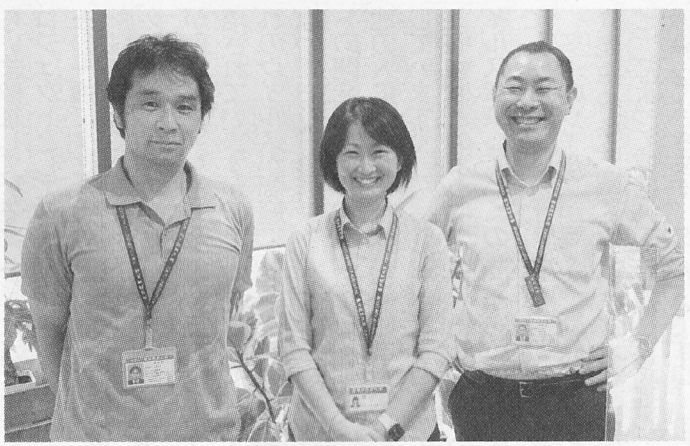
東京農業大学農学部農学科 植物病理学研究室 キム・オッキョン助教

植物病理を究めるため日本へ留学

東京農業大学農学部の高畑健教授が研究しているペピーノがトマトの青枯病および萎凋病の発病抑制に効果があり、その論文が高畑教授ら7人の連名で発表されている。その1人が韓国出身のキム・オッキョン助教で、長年植物ウイルスの研究をしているという。どのような経緯で日本の農業大学で教鞭をとるに至ったのか話を伺った。

キム助教は韓国南東部の大邱（テグ）市出身で、地元の国立慶北（キョンブク）大学農生物学科で植物病理に関して学ぶとともに副専攻で日本語を勉強した。より理解を深めるために植物病理の研究が進んでいる日本の大学で学ぶことを決心したものの、どの大学に行くか決めかねていたが、学科に東京農大出身の先生がいたこともあり、大学でコンタクトをとってもらったところ受け入れ可能とのことだった。4年生の時に1年間の予定で交換留学生として2005年に来日し、熱帯・亜熱帯地域における糸状菌やウイルスなどの病原体、各種害虫とその天敵を研究対象としている熱帯作物保護学研究室に所属する。なお、現在慶北大学と東京農業大学は交流協定を締結している。

（2面につづく）



2014年から助教として活躍するキム助教（中央）。学科長の篠原教授㊨とペピーノ研究の高畑教授とともに

GPEC

施設園芸・植物工場展2021

7月14日～16日　愛知県国際展示場で

日本施設園芸協会主催の施設園芸・植物工場展2021（GPEC）と、スマートアグリコンソーシアム主催のスマートアグリジャパンが7月14日から16日までAichi Sky Expo（愛知県国際展示場）において合同開催される。

今回で6回目となるGPECは施設園芸と植物工場に特化した専門展示会として東京で開催されてきたが、東京オリンピックが開催される関係で昨年愛知県で開催することになっていた。しかし、コロナウイルス感染が蔓延したことで開催を1年延長したため、3年ぶりに開催される。

主催する日本施設園芸協会の鈴木秀典会長は、「生産者の高齢化が進む中で施設園芸面積は減少傾向にあり、また近年は台風や集中豪雨などの気象災害が多発しております。このような状況の中で、『未来につなげるNIPPON農業』をテーマに、GPECが施設園芸の中心地であるこの地で開催することは、極めて時宜を得たものであると考えております。発展の著しいロボット、AI、IoT等の新技術を導入したスマート農業の展開を積極的に推進しております。施設園芸においても、植物生産を最適化する環境制御、養液栽培システムの開発・普及が進むとともに、栽培管理作業、収穫作業のロボット化の研究も実用化に向けて展開されております。これらの新技術の積極的な導入により、面積当たりの生産量を大幅に増加させるとともに、省力化も可能となります。GPECはまさに、そのような先進技術を学ぶ場として絶好の機会です。来場されたすべての方が、必ず何らかのヒントをお持ち帰りいただける展示会となることを願っており、多くの皆様のご来場をお待ち申し上げます」と呼びかけている。

ハウスの環境制御、自動施肥、潅水システム、AIやクラウドを活用した生産管理や収量予測、ハウスの大雪・台風・停電対策用資材などの展示が行われ、三菱ケミカルアグリドリーム、東都興業、誠和、ネポン、渡辺パイプ、大仙、フルタ電気、サカタのタネ、トヨタネなど約100社の企業や団体が出展するほか、セミナーや出展者プレゼンテーションも行われる。

会場は中部国際空港（セントレア）に隣接するAichi Sky Expo（愛知県国際展示場）で、名鉄名古屋駅からだと最速で30分ほど。入場するには事前登録が必要で、大会の詳細や事前登録はGPECホームページにて。（www.gpec.jp）